

かいまみ

垣間見

物の隙間から、こっそり覗き見をすること。
「かいまみ」とも。

王朝の宮廷女性は、成人するとみだりに人前に姿を見せることをせず、同一生活圏の者でなければ、同性どうしでさえ直接顔を合わせることは稀であった。そこで男たちは、簾中に生活し、屏風や几帳の彼方にいる女性を一目見ようと覗き見の機会をねらうことになるし、女たちにしても、人前に姿を見せぬがゆえにものかけから男性の姿をうかがい、また、新参者は覗き見の対象とされたのである。これは、当時日常的に行なわれていた王朝の風俗であり、日記・随筆作品のなかにも見られる。『和泉式部日記』には、敦道親王の自邸に入ってまもなくの正月一日ころの記事として、「上の御方の女房、出て居て物見るに、まずそれを見でこの人を見んと、(横に)穴をあけさわぐぞ、いとさまあしきや」とあり、親王の父冷泉院に参賀する殿ぼらの姿を見物するのではなく、親王の新しい愛人を見ようとして大騒ぎをする正妻側の女房たちの様子を批判的に描いているし、

『更級日記』では、祐子内親王の御所に出仕しはじめた当時のことを、「立ち聞き、かいまむ人のけはひして、いといみじくものつまし」と回想している。一方、「宮に初めて参りたるころ」を語る『枕草子』一八四段には、何事につけても「つつまし」と感じずにはいられない心境に続けて、雪の見舞いに中宮定子のもとを訪ねた道隆(実は伊周)を、「いま少し奥に引き入りて、さすがにゆかしきなめり、御几帳のほころびよりはつかに見入れたり」と、覗き見せずにはいられない心の揺れが描かれている。

しかし、王朝の物語文学における「垣間見」は、それらとは別の次元にある。物語文学の構成上の手法として、「垣間見」がきわめて重要な役割を果たしていることが早くから指摘されてきた。つまり、物語における「垣間見」には、「見る」と「所有すること」という神話的発想が色濃く残っており、男による女のかいまみは、「見る者」と「見られる者」の複雑な心理を描きつつ、恋物語の始発を形づくるうえで重要なモチーフとなるのである。たとえば、『竹取物語』の求婚譚は、かぐや姫をかいま見した男たちの惑乱に始まるし、『伊勢物語』一段の「いち

やきみやび」も、「いとなまめいたる女はらから」のかいまみによってよび起こされたものであり、それが後に、二条の後・伊勢の齋宮とのタブー侵犯の恋物語を招きよせるのである。『源氏物語』においてもさまざまなかいま見が語られるが、とくに、第一部、第二部、第三部の主要事件の発端にかいま見が置かれていることは興味深い。すなわち、「若紫」で光源氏が後の紫の上となる少女を発見する場面、「若菜上」で柏木(と夕霧)が猫のいたずらから女三の宮を目のあたりにする場面、そして「橋姫」で薫が宇治の大君・中の君姉妹を覗き見る場面である。

現在においても、かいま見の場面は、物語文学における語りの方針としてもさまざまに問題を投げかけている。登場人物と語り手の視線が同化(または異化)することによって、語り手と聞き手が共有する表現空間が作中世界内(または作中世界外)へと移動するのである。そのメカニズムを、敬語の有無、呼称、こ・そ・あ・どの指示語体系、および時制表現が担っており、かいま見の時空は、まさにそれらに支えられてリアリティを獲得しているのである。

(保戸塚 朗)